

● **薪割り作業が進む** 21日 23日 ナラ枯れ木の玉切りしたものを割機にして運び込んだ草内倉庫前の広場を確保することは、今後の取組みにとって、なくてはならないところです。これまで一回2時間程度の作業を3日間繰り広げてきましたが、約20%を割れたのではないかと思います。原木がナラ枯れで、もろくなっているものもあって、思うようにすんなりと割れてくれなくて非常に苦勞をしています。また長さが不揃いで、薪割機の有効長さが56センチなので、それ以上のものは割り切れません。縦にしたりして少し無理をして押し込んでいるのですが、調子よく進めることは至極難しいです。それでも少しずつ苦勞しながら作業を続けていました。割れるものから能率よくと考えますが、なるべくきれいに片づけていきたいという心が働きますので無理をしてしまいます。23日は午前中マラソン用竹の伐採で6人がお手伝いを行い、午後から薪割を行いました。寒波が来ると予想されていましたが、午後からは冷たい北風が強く吹きましたが、倉庫の南側だったので、しのぎやすかったです。

● **近年のパワーポイント資料がまとまる** 12月に行われた京都府環境フェスティバルの二日目の午後に、里山の会が出演発表するミニステージの時間を設定いただきました。この時間は、10分間の持ち時間で森島保理事、深田前理事長、そして最後に播川理事長の三人のそろい踏みで、竹蛇籠の取組み、中聖牛の取組み、京都府こどもの水辺のパワーポイントを連続発表しました。この資料を含めて夏原グラントなどでのプレゼンテーションは10本を超えるものでした。これの紙方式で全てをまとめてみました。これまでにパワーポイント化した原稿を洗いざらいまとめる努力をしております。手間暇がかかりますが、結成20年を数えることになって、夏の成果物として、早期にまとめ上げたいと思っております。現在作業中ですが、木津川植物花の写真集(スライド800枚)もの製作にも挑戦しています。紙文化として製本化すると原価が5万円となるものです。里山の会の結成20周年記念の最高傑作物であります。早期完成するよう努力しております。

● **木津川沿川活動団体交流会** 21日 セセラギで42人の参加をいただきました。メイン報告は「地球温暖化と防災」として京都大学防災研究所の准教授の佐山敬洋氏が講演をされました。東北震災の津波の来襲に逃げそびれる家族のビデオを映して、人々の心理を解明いただきました。出席者の多くは実感として取らえることができなかつたようです。いち早く避難することの大切さを実感したという感想が寄せられていました。久々に科学的に事実をもって説得力のあるわかりやすい濃い講演だったという感想も聞かれました。淀川河川事務所の白波瀬副所長のお話で内排水対策の実態が21号台風の例で説明されていましたが、準備した資料が不足するほど、多くの皆様のご参加をいただきました。琵琶湖のシルバー学習クラブの皆さんが4名も駆けつけていただきました。

● **桜谷先生からの提案をいただきました。** 事務局会議で検討した結果をどこまで実行できるかわからないけれど先生の提起に応えるべきではないかという意見が多く出されて、提案に応じてゆこうということで一致しました。先生のご提案を、そのまま掲載いたします。皆様のご協力をお願いいたします。

カスミサンショウウオの保全

1 ; 継続調査 当地は京都南部でも有数のカスミサンショウウオの生息地で、大変貴重な場所なので、昨年に引き続き、生息数や環境条件(水温、水位等)の調査の継続が不可欠です。

2 ; 生息場所の整備 生息地の周辺のナラ枯れは成体が活動する前の1月中に処理して、安全に調査できるようにする必要があると思われます。また、調査の効率化と精度向上(特にサンショウウオの卵数の把握の精度向上)の目的、池に木道などの設置が必要と思われます。参考までに、近畿大学奈良キャンパスでの例をプリントして添付します。

3 ; 危険分散 万一、現在の生息地に異変が起り、サンショウウオの生息が危惧されそうな場合に備えて、移植も予め検討しておく必要があります。すでに、農園の好適と思われる水域の水温や水位の事前調査は行われおり、移植がおおむね好適と判断されています。(2017年12月23日の検討会で)が、今年の移植の実施の可否について3月~4月に検討する必要があると思います。

4 ; 調査範囲の拡大 カスミサンショウウオは、現在は 2 つの池で生息が確認されていますが、最初は尾根の反対側で生息が確認されており、また、安永さんにより付近の水域の状況も詳細に調査(張付けプリント参照)されていますので、さらに調査範囲(特に卵)を広げる必要があると思います。近畿大学奈良キャンパスでは約 1 キロ四方の里山林のほぼ全域で、個体を確認しています。移動能力はかなり高いようです。さらに、府道や普賢寺川を挟んだ農園側にも生息の可能性もあるかもしれません。特に、移植を実施する場合は、初めから生息していないことを確認しておく必要があります。(生息ゼロを確認するのは困難なのですが)。

5 ; 学会発表に向けて 動植物の生態や保全、外来種問題、環境教育などに関する研究を行っている「日本成体学会」は毎年 1 回全国大会を各地持ち回りで行っていきます。今年は 3 月に札幌で行われますが、来年(2019 年)は近畿地区の予定です。(場所や日程(3 月?)は未定、2020 年は中部地区(北陸も含む)の予定です。添付資料のように、この学会は中高校生の研究発表を歓迎していますので、来年はぜひカスミサンショウウオ、或いは当地里山の生物多様性の保全の取り組み活動などに関する発表をお勧めします。申込やタイトルの締め切りは、今年の秋と思われそうですが、データは発表直前(来年 3 月頃)まで作成可能(ポスター発表なので)です。申し込みは所属校を通じて行いますが、共同研究者に NPO や大学などが含まれていてもかまいません。ぜひご検討ください。

オオムラサキの保全

1 ; 幼虫の餌植物(エノキ)の植栽 現在の農園の榎はちょうどオオムラサキやタマムシなどの発生に好適な大きさ(高さ、太さ、葉の茂りぐあい)ですが、今後のために苗木を植栽する必要があります。すでに 19 号地にエノキの幼木が数本植栽され、ゴマダラチョウなどの発生が確認されるなど成果が出ています。

2 ; 成虫の餌植物のクヌギ、ヤナギ類の植栽 オオムラサキ成虫はクヌギやヤナギなどの樹液を吸います。しかし、農園周辺の里山はナラ枯れが進行し、樹液の供給がかなり減少しているようです。そこで、新たにクヌギを植付ける必要があります。添付のプリントのように、近畿大学奈良キャンパス(奈良市の矢田丘陵)では 9 年前にドングリを播種(実生)し、現在では幹の直径が 10 cm 程に成長して、その機能を果たしつつあります。コムラサキ等がヤナギの樹液に飛来しているのがよく観察されています。

3 ; 調査範囲の拡大 現在、オオムラサキの観察は、成虫、幼虫共に毎年、農園を中心に行われており、貴重なデータが蓄積されています。農園付近には、ほかに約 20 本(つまり全体では 40 本ほど)のエノキが自生しており、以前の調査ではオオムラサキの越冬幼虫もかなり確認されていますので、可能な限りデータを収集するとよいと思います。(ただし、ナラ枯れによる倒木や落枝、イノシシなどには細心の注意が必要です)。木津川河川敷にはエノキがかなり自生し、樹液の出るヤナギ類も多いので、オオムラサキ(越冬幼虫)の生息確認は必要と考えられます。(ゴマダラチョウはかなり生息が確認)。

● 地域解説会(木津川はどんな川) ガイド解説者決定進む

- 2 月 12 日 宇治南コミセン 仁枝洋 京都市の川を美しくする会代表 河川レンジャーアドバイザー
- 2 月 18 日 八幡文化センター 竹門康弘 京都大学防災研究所准教授 理学博士
- 2 月 24 日 城陽市北コミセン 須川恒 精華大学准教授 府レッドデータ選考委員
- 3 月 3 日 府営団地第二集会所 鈴木康久 京都産業大学教授 琵琶湖淀川流域圏連係交流会副代表
- 3 月 18 日 木津川市山城町 アスピーア 依頼中：中津川敬朗 やましらの歴史